

特集

二〇一六年度公開シンポジウム 前近代東アジアにおける怪異と社会 テクスト・文化・自然環境

二〇一六年十二月一〇日（土） 於 立教大学池袋キャンパス 五号館五・二四教室

〔主催〕 立教大学日本学研究所

〔共催〕 立教SFR「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」（研究代表者…小澤 実）

【開催概要】

「前近代東アジアにおける怪異と社会 テクスト・文化・自然環境」
二〇一六年十二月一〇日（土）
於 立教大学池袋キャンパス 五号館五二四教室

〈プログラム〉

小澤 実（立教大学文学部准教授）

「問題の所在」

高谷 知佳（京都大学大学院法学研究科准教授）

「日本中世都市の秩序と怪異」

水口 幹記（藤女子大学文学部准教授）

「蘇民将来札考——井戸跡出土木簡を手がかりに——」

野崎 充彦（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「怪異」の諸相——朝鮮前期を中心に——

佐々木 聡（日本学術振興会特別研究員）

「災異と禳災のポリティクス」

佐野 愛子（国際日本文化研究センター研究員）

「ベトナム李仁宗代の怪異をめぐる」

北條 勝貴（上智大学文学部准教授）

「環境文化史から怪異を問う——伝播論／環境還元論の止揚へ——」

総合討論

【シンポジウム概要】

怪異とは何か、という問いは、対象を問わず、時代を問わず、地域を問わずこれまでも様々な分野で論じられてきた。説明し得ぬもの、語りえぬもの、自身の理解でまななぬものとして立ち現れる怪異という現象は、古今東西の多くの人々にとってよほど魅力のある磁場なのだろう。とりわけ、わが国では、怪異現象に対する人間の反応が生き生きと記述される文学テキストの研究において、怪異を対象とする研究が蓄積されてきたという印象がもたれる。本シンポジウムにおいても、やはりそのような怪異を問うことを第一の目的としている。

そうした歴史上の怪異をめぐる近年の目立った仕事として、報告者のひとり高谷知佳による『怪異』の『政治社会学』（講談社メチエ、二〇一六）がある。室町期の記述資料に残る怪異言説を収集し、京都という都市空間でなぜ怪異が発現し、語りが流布し、記録されるのか。都市史・法制史の専門家である高谷は、怪異言説を支える室町人の心性を同時代の社会構造に位置付けることで歴史学的に読み解いている。高谷の議論にくわえて、もう一点興味深いのは、山中由里子編『驚異』の文化史中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、二〇一五）である。多数の著者が、とりわけキリスト教圏ならびにイスラム教圏における驚異と呼ばれる現象を諸言語で記されたテキストの中に探り、当該一神教文化圏における多様な時代と地域における驚異の諸相を比較的に明らかにした論集である。

この二つの近著から立ち現れてくる問いは以下の二つである。ひとつは、まずある特定の歴史社会がもつ固有性である。固有の特徴を持つ社会において、異形のものや天変地異といった怪異現象は、どのように発現し、機能し、そしてその怪異現象を生み出した社会に影響を与えたの

か、またその社会の側は怪異現象をどのように規定し対処したのか。もうひとつは、そうした固有性を持つ社会間で何が共通し何が異なるのか。本シンポジウムでは、日本、朝鮮、中国、ベトナムという、異なる前近代社会の事例を取り上げ比較することになるが、実はここにもうひとつ仕掛けがある。山中編著で、キリスト教にせよイスラム教にせよ中東起源の一神教世界での驚異を比較提示したように、本シンポジウムでも、いずれも漢字文化圏に属するテキストの事例を取り上げた。このような共通文化の中にある複数の特定社会に目を向けることで、何か見えてこないだろうか。

以上の関心に従い、今回のシンポジウムでは、異なる地域を専門とする五人の個別報告者に登壇いただいた。以下、企画者に提出された報告者のレジュメを転載することで、報告の意図を記録しておこう。

高谷 知佳「日本中世都市の秩序と怪異」

日本中世においては「神仏が国家を守る」という前提のもと、神仏への信仰を正当性の根拠とする法や権益が多様なかたちで存在し、中世末期にその多くが姿を消していった。本報告では、その一つである「怪異」をとりあげたい。

「怪異」とは神仏が示した凶兆をさし、一〇世紀以来、寺社が政権に対して怪異を注進して自らの存在感を示し、政権は寺社に対して奉幣などの対処を行って社会不安を収拾するという、政権と寺社の互酬的な関係が反復されてきた。しかし室町期には、首都への一極集中型の権力構造のもとで、注進も対処もされないまま社会で怪異が拡散する状況、また寺社が政権ではなく社会へ怪異をアピールして参詣や勧進などの権益を得る状況などが多発する。

こうした怪異のインフレーションともいべき状況のもと、参詣や勧

進の生み出す弊害に対して、政権は宗教的ではなく、極めて現実的な治安重視の対応をとった。怪異は、単線的にはなくインフレーションによって衰退したのである。（拙著『怪異の歴史社会学』第二章から第四章を中心とする）

水口 幹記「蘇民将来札考——井戸跡出土木簡を手がかりに——」

物忌は、「氣」（怪）にかかることがあるとき、陰陽師が占申（怪異占）することにより設定される。多くの場合、人々は「物忌札（簡）」を門戸などに掲げ、物忌中であることを他者に知らせる。この物忌に代表されるように、怪異を含むある現象に対し、「札」「符」を用い対処する方法が古くから行われていた。本報告の主題であり、現在も各地で配布されている護符「蘇民将来札（符）」もその一つである。

「蘇民将来札」の起源譚は、『備後国風土記』逸文に残るが、その由来や逸文の構成などをめぐっては歴史学・文学・民俗学などによる膨大な研究蓄積がある。そこで、本報告では、まずは研究史を概観した上で、現在の所八十点以上の報告例がある出土蘇民将来木簡の整理を行う。また、蘇民将来木簡の多くが井戸跡から出土していることに注目し、日本古代における井戸について言及するほか、「埋める」こと・「投げ入れる」ことといった東アジアにおける呪的行為の検討を通し、人々がなぜ井戸に蘇民将来札を「投棄」したのかについての私見を述べる。

野崎 充彦「怪異」の諸相——朝鮮前期を中心に——

通常、怪異とは幽霊や妖怪など超自然的な現象をさすが、ここでは霊異や驚異といった非日常的、または非合理・非理性的なものの一般をも含む。但し、合理的か否かはあくまで当代の基準による。

朱子学を国是とした朝鮮王朝では仏教や道教・シャーマニズムといっ

た思想・宗教的な異端に対してのみならず、自国の歴史や国土地理・自然現象に対する博物学的関心、また文学理論に至るまで諸々の文化的要素が朱子学的価値観へのカウンターカルチャーとして位置づけられ、それに如何なる対応をとるかが否応なしに問われ続けていた。

朝鮮前期における怪異はそのような時代精神のなかに棲息していたのであり、異端そのものもさることながら、当代の士大夫らが朱子学的な「理」に拠りながら怪異なるものに対し、どのような考察を加えたのかに興味深い。そこに端なくも、建国もない朝鮮の文化的様相が如実に反映されているからである。

佐々木 聡 「災異と禳災のポリテクス」

災異とは、『漢書』董仲舒伝の言説によれば、天が災害や怪異によって為政者の過ちを咎めることである。そのため度重なる災害・怪異を止めるには、「妖は徳に勝たず」というように、為政者が徳を修め、善政に努めることが求められた。その一方で、災害・怪異を呪術によりは祓い清める「禳災」も行われた。安居香山は、これを「未開な呪術思想」（『緯書の成立とその展開』国書刊行会、一九七六、二二九頁）として、漢代的な災異思想に対置させる。実際にこうした呪術は、災異思想を理念的背景に持つ五行志や勅撰占書には見えず、民間の通俗占書に多く見える。

しかし、歴代の礼制においても禳災的な思想は必ずしも否定されていない。実際、『後漢書』郎顗伝には、消災の術により政治に参与する者たちが見え、また王充『論衡』にも変異を祈祷により常態に戻す災異学者の一派が見える。そこで本報告では、国家理念と政治の場における災異と禳災の関係について検討してみたい。

佐野 愛子 「ベトナム李仁宗代の怪異をめぐる」

黎澄が一四三八年に著した『南翁夢録』『僧道神通』には、ベトナム李朝代（一〇〇九―一二二六）に、正体不明の妖物が、昼夜を問わず鳴いたという怪異が記されている。そこで李朝皇帝によって僧の覚海と道士の通玄が呼び出されて事態解決がはかられた。

この退治譚は他の資料にも確認できる。しかし、『南翁夢録』と大きく異なるのが、「妖物」が最初から既知のものとして登場する点である。つまり、他資料において、それは怪異譚というより、むしろ、僧と道士の法力比べの側面の強い内容となっている。

李朝は、創始期より仏教を保護していた上、道教も同様に保護していた。なおかつ、李仁宗には跡継がいなかったため、子どもを授かろうと仏教や道教の力に頼っていた背景が、このような僧と道士の能力比べの話を生み出したといえる。そこに黎澄が怪異のスパイスを加えたのはなぜか。李朝と黎澄との時代の開きのみならず、彼の過ごした文化や環境から考察したい。

以上の報告を受けて北條が、「環境文化史から怪異を問う——伝播論／環境還元論の止揚へ——」と題するコメントをおこなった。北條のコメントは、怪異をただ怪異として捉える怪異論が活況を呈している状況を相対化し、個別報告それぞれの問題点を指摘すると同時に、そうした各論的論点摘出の前提となる、テクストの読みそしてテクストで語られる怪異の置かれた環境に対する注意を喚起した。ひとつはいわゆる言語論的転回の問題である。言い尽くされたことであるかもしれないが、怪異テクストを人間と自然現象との相互作用として読み解こうとすると、そこには自ずとそのテクストの作者が意図した読み方とは別の現実世界を見て取ることができる。北條は、すでに自家薬籠中としている『宝苑珠

林』やトンパ經典を事例として、テキストを文字通り読むことの危険性を示し、幾つかのキーワードに注目することでオルタナティブな読み方の可能性も提示した。もうひとつは文化人類学で言われるマルチスピースの視点である。怪異現象をとらえる場合、通例われわれは、人間を社会における特権的存在として（無意識的に）措定し、人間の視点から構成した世界観の中で諸現象を説明する。怪異現象も同様であり、テキスト作成者の基準で、「怪異」と認識される存在へと対象を押し込め、人間社会の論理で説明しようとする。しかしその「怪異」として対象化された存在もまた、自然環境という世界の中では、人間にまけずおとらず自律的に行動する、ひとつの構成主体である。視点を構成主体それぞれに合わせて複数化することにより、人間中心として理解されてきた世界がもっているはずの重層性に気づくことの意義を提示した。

当日の報告は前近代社会を対象としていたが、歴史は、ただ切り離された空間でもなければ、そこでただ止まっている凍てついた時間でもない。本シンポジウムの射程は、合理的に理解し得ぬものや突如襲ってくる大規模自然災害におお苦慮している、わたしたちの生きる現代社会までも見据えているといつてよいかもしれない。

本シンポジウムは、当該地域における第一人者による事例の提示と、北條によるテキスト読解ならびに社会の捉え方に対する方法論の提示と、その提示に基づく個別批判により、きわめて層の厚いやとりが可能になったと理解している。参加者も学内関係者にとどまらず、学外の研究者や怪異愛好家など、多岐にわたった。本シンポジウムの内容は、他の事例も追加することにより論集として刊行予定である。

（おざわみのる 立教大学文学部准教授）